

解答・解説

問1 傍線部を直訳すると、「山奥に棲む仙人に、ものを申し上げようと言う人がいる」となるが、これは婉曲表現。「山人」、「もの聞こえむといふ人」とは誰なのかを解釈する。傍線部の直前に「ここに住み給ひし人（＝ここにお住みになっていた人）」は、いまだおはすや」とあるので、「山人」＝「ここに住み給ひし人」である。それはかつて「もの言ひし人（＝情を通わせた人）」のことでもある。少将が彼女のことを「山人」と呼ぶのは、仙人の棲む山奥と言いたくなるほど彼女の家が「あはれげに荒れ人げなき所」になっているからだ。この女性に話をしようというのは少将自身である。傍線部直後に「ものせよ（＝伝えよ）」とあり、傍線部は女性への伝言であると思われる。

ア 山奥にいる仙人に、話したいという人はどこにいるのだろうか。
少将であるはずの「もの聞こえむといふ人」が誰かを尋ねている。（×）

イ 山奥のような場所に棲む仙人のようなあなたに、私は話をしよう。
「山人」を正しく捉えている。また、「もの聞こえむといふ人」が少将自身となっていて正しい。（○）

ウ かつてここに住んでいて山奥に帰ったらしい仙人と、話したい。
「山人」にたとえた女性がもうここにはいないことは、まだ判明していない。（×）

エ 山奥にいる仙人のようなあなたに、話があるという人を知っている。
「もの聞こえむといふ人」を少将以外の人だとしている。（×）

よって、正解はイ。

選択肢判定チェック

問2 本文の流れを確認する。少将は、通り過ぎてきた家よりも「おもしろく」思われた家の前で和歌を詠む。和歌の内容から、趣深さは花桜が「にほふ」からだとわかる。この家に住んでいた昔の恋人を思い出していると、白い服を着た者が家から「出づめり」というので話しかける。すると彼女はもうここにはいないと言われる。もしや尼にもなったのだろうかとか気がかりに思いながらも世間話を続けていると、妻戸を開ける「音すなり」。ほかにも人が住んでいるらしい。

「おもしろし」：趣深い、風情がある。視覚的にはなかなか美しさを表現することが多い。

「にほふ」：美しく輝く。照り映える。現代語では嗅覚的な表現だが、もとは視覚的な美しさを言う言葉。

助動詞「めり」：「見あり」が原義。視覚的な推定。／助動詞「なり」：「音あり」が原義。聴覚的な推定。

選択肢判定チェック

ア 少将は、和歌の、美しい花桜の木かげに自然と立ち寄りたて通り過ぎることができないという内容に合致する。（○）風情ある家に咲く桜の美しさに、つい足を止めることにした。

イ 白い服を着た者が、荒れ果てて人気がない家の中の様子を伺っていた。
家の中の様子を伺っていたのは少将。「白き者」は家から出て来た者。（×）

ウ 少将が以前恋仲になった女性は、今は出家して尼になってしまっていた。
「尼などにやなりたるらむ」というのは、少将の想像で実際は不明。（×）

エ 少将が立ち寄った家は荒れ果てていて、もはや誰も住んでいなかった。
「白き者」や妻戸を開いた人など、家に人はいる様子。（×）

よって、正解はア。

古文の世界

荒れ家と姫

後ろ立てを失うなどして荒れてしまった家に住む姫を貴公子が見いだすというのは、物語の一種の定型である。『源氏物語』の「夕顔」や「末摘花」すえつはななどがある。本文の後の部分でも、妻戸を開け放ったところに姿を現したのは美しい少女であり、少将は「うれしくも見つるかな」と思って家路につく。『枕草子』には、一家が政治的に失脚した後の中宮定子の屋敷で、草を刈り取ってはどうかと言われた女房が、「ことさら露置かせてご覧すとて」と切り返す話がある。置く露を楽しむ風流心から、わざと草を生やしていると言ったのだ。ここでも本文と同様、荒れた庭の草木は風流心と結びつけられている。

出典
堤中納言物語
短編物語集。

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて制作されたと考えられるが、作者・成立年代とも未詳。洗練された筆致と卓越した技巧で描かれ、「花桜折る少将」「虫愛づる姫君」など十編を収録。

6 復習 「堤中納言物語」

解答・解説

文法Q 省略Q 解答と品詞分解・現代語訳

くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり。いますこし、過ぎて曇りのない月（光）に（照らされて）、ここかしこの桜の花の木々も、まるで（春霞に）間違えそう（なほど）に（淡く）霞んでいる。もう少し、通り過

見つるところよりもおもしろく、過ぎがたき心地して、
（黙って）通り過ぎにくい気持ちちがして、
（見て見（てき））た家よりも趣があり、

助動詞
可能・未然形

そなたへと行きもやられず花桜にほふ木かげにたちよられつつ
あちらの方角へと通り過ぎることもできない。花桜が美しく輝く木のかげに自然と立ち寄られることよ。

とうち誦じて、早くここにも言ひし人ありと思ひ出でて立ちやすらふに、築地のくづれより、白き者の、
とちよと声に出して詠んで、以前ここ（Ⅱこの家）に情を通わた（Ⅱ恋仲になった）人がいると思ひ出してため
らいながら立ち止まっていると、築地の崩れたところから、白い服を着た者が、

助動詞
推定・終止形

いたうしはぶきつつ出づめり。あはれげに荒れ人げなき所なれば、ここかしこのぞけど、とがむる人なし。
たいそう咳をしながら出てくるようだ。いかにも気の毒な様子で荒れ人の心配のな
いところであるので、少将は、あちらこちらのぞくが、気にかける人はいない。

このありつる者の返る呼びて「ここに住み給ひし人は、いまだおはすや。『山人にも聞こえむといふ
このさっきの（白い服を着た）者が（家の）「ここにお住みになっていた人は、まだいらっしゃるか。『仙人にものを申し上げようと言っ

助動詞
尊敬・連用形

人あり』とものせよ」と言へば、「その御方はここにもおはしませず。何とかいふ所になむ住ませ給ふ」
人がある」と伝えよ」と言つと、「白き者は「そのお方はここにもいらっしゃらない。（今は）なんとかというところにお住みになっている」

助動詞
現在推量・連体形

と聞こえつれば、「あはれの事や。尼などにやなりたるらむ」とうしろめたくて、「かの光遠に会はじや」
と申し上げたので、「気の毒なことよ。ここに住み給ひし人は、尼などになつてしまっているのだろうか」と
「（お前は）あの光遠に会わないだらうか」

（もの言ひし人）

助動詞
推定・終止形

など、ほほゑみでのたまふほどに、妻戸やはらかい放つ音すなり。
など、微笑んで（白い服の者に向かって）世間話をしむけて、おっしゃるうちに、妻戸をそつと開放す音がするようだ。

単語Q 解答

- ア 美しく輝く。美しく照り映える。
イ いかにも気の毒な様子だ。
ウ いらっしゃる。
エ 気がかりだ。心配だ。